

発想を逆転 世界のコレクションがすべて所蔵品

国立新美術館

THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO

日本最大級14000㎡、広大なサッカースタジアムとほぼ同規模の展示スペースが活用できる国立新美術館が2007年1月に開館した。所蔵品は一点もなく、世界的視野とレベルの企画展、全国からの美術団体による展示などを開催する、英文表記通りのアートセンターという特性を持つ国立の美術館で、連日国内外からの多くの観客で賑わい、世界からその活動が注視されている。

【世界で有数の21世紀型美術館】

美術館の多くは公立私立を問わず、西洋美術・東洋美術・日本美術の作品、あるいは限定された時代や流派、または特定の作家など、美術館所蔵の作品を中心に常設展示をし、それらに関わる企画展を随時開催して、その個性と存在意義を内外に示している。この国立新美術館は、東京上野の国立

西洋美術館、東京竹橋の東京国立近代美術館、京都岡崎の京都国立近代美術館、大阪中之島の国立国際美術館に続き、独立行政法人国立美術館としては5番目、およそ30年振りに登場の美術館である。

「首都東京に公募展に必要な機能を備えた新しい美術館建設を」という30年前に国に出された要望をもとに構想され、そのミッションは、全国の美術団体への会場提供、新しい美術動向の紹介を通して美術に関わる創造活動の展開、アーティストの育成支援、そして国内外の美術や美術展についての情報・資料の収集保存、提供、さらには日本の美術情報を海外へも発信することである。

立地は東京メトロの六本木駅や乃木坂駅に近く、アールデコ調の大規模近代建築だった東京大学生産技術研究所の跡地である。ここに出現した国立新美術館は、大きな曲面を描くガラスのカーテンウォールに輝く建物で、2000年に実施された黒川紀章建築都市設計事務所と日本設計のジョイントベンチャーの設計によるものである。

黒川氏が50年にわたって主張してきた「共生の思想」のもと、「生命の原理に基づく共生の建築」となっている。大地にうねるような曲線とふくらみのある建物は、機械の時代には無機質な直線、これからの生命の時代には有機的な曲線、という設計コンセプトが明快に表現されている。淡いグリーンに包まれた繊細なデザインの外観は、眺める場所によってその表情が微妙に美しく変化するために、まず建物の周りをめぐってはカメラを構える来場者が絶えない。



波のようにうねる ガラスのカーテンウォール



印象的なふくらみの共生の建築 遠景は東京ミッドタウン

【海外初 ポール・ボキューズが出店】

エントランスである円錐形の自動扉を抜けると、21.6mの高さのひろびろとしたアトリウム、陽光がさんさんと注ぐなか、屋上部にレストランやティーサロンを備える逆円錐形の構造物が圧倒的な量感で迫り、ダイナミックな空間を形づくっている。そのまま1階展示室へ、またエスカレーターで2階の展示室、3階の講堂、研修室、ライブラリーへと導かれる。

展示室の基本モジュールは2000㎡で、企画展示室2室と1000㎡の展示室10室というのがベースとなる使い方である。無柱の大空間は可動展示パネルで自由に分割でき、10余りの展覧会が同時に開催できる構造となっている。

さらなる特徴は地下1階のバックヤードで、広い車両待機場やトラックベース、作品整理室、審査室などが機能的に配置され、予想される大量の作品の搬入と審査、そして搬出が極めてスムーズに行なえる設計となっている。表舞台と同様に舞台裏を重視するこの姿勢も21世紀型美術館といわれる大きな理由であろう。

美術館には憩いのスペースと機能が欠かさない。この新美術館のコンセプトのひとつは「森のなかの美術館」であるが、近くの青山公園などの緑が館内から眺められるだけではない。フランスのリヨンで40年以上三ツ星を維持し続けるポール・ボキューズがプロデュースするブラッスリーが世界ではじめて海外に出店、この館内の3階レストランで、展覧会終了後の夜10時まで正統なフランス料理を提供している。2階のサロン・テロンド、1階のカフェコキュー、地階のカフェテリアカレとともに洗練された食の世界を演出していて、この美術館の特筆すべき魅力といえるだろう。またデンマークの家具メーカーフリッツ・ハンセン等の名作が館内随所に置かれ、北欧のデザインに浸れることも見逃せない。

【相次ぐ国立新美術館ならではの企画展】

開館記念展のはじまりは、「20世紀美術探

検—アーティストたちの三つの冒険物語—」である。都市中心の物質文明のなか、モノに溢れた世界でのアーティストたちの果敢な挑戦を紹介、引き続きパリ・ポンピドゥー・センター所蔵作品展「異邦人たちのパリ1900—2005」を開催、20世紀のパリの表情を写真や絵画、彫刻を織り交ぜて展示し、都市を生きたアーティストの生活と芸術に迫った。さらに息づく間もなく開催された「大回顧展 モネ」は、オルセー美術館、ボストン美術館、日本の国立西洋美術館など国内外の77館から97点、モネの影響を受けた作品も加えて計123点が展示されるという、まさに大回顧の名にふさわしい、国立新美術館ならではの企画展となつて多くの観客を魅了している。

【六本木 アート・トライアングル】が始動

六本木地区は、この国立新美術館と六本木ヒルズの森美術館、そして東京ミッドタウンのサントリー美術館が加わり、東京の

新しいアートの拠点となりつつある。すでに周辺の多くのギャラリーなども視野に入れた、六本木アート・トライアングルと銘打った連携活動がスタート、新美術館の形態にも似た大きなうねりを見せはじめている。

21世紀は文化の世紀、東京が世界の文化の中枢を担う国際的な都市になりうるかどうか、日本の首都東京のあすのビジョンを象徴するゾーンとして、いつそう賑わいが増したこの六本木界隈に、大きな期待がかかっている。



次々と開催された開館記念展



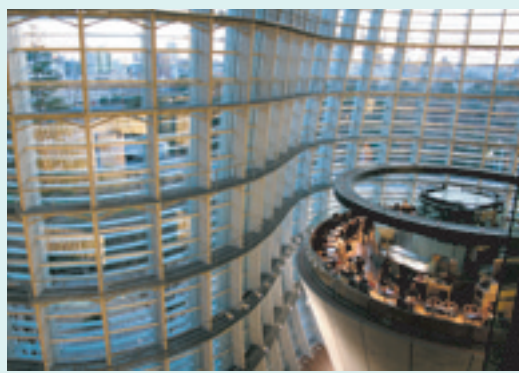
日本的な感性が漂う館内 展示室へのアプローチ空間



内外の美術書を網羅して公開されているライブラリー



アトリウム空間に浮いているようなレストラン



外の光と風景が映りこむティーサロン



地下1階ホール アルネ・ヤコブセン デザインのエッグチェアなど

異色の形状で出現した国立新美術館 青山の緑の向こうに新宿副都心ビル群が見える（提供 国立新美術館）



館内の光が浮かび上がる夜景はユニークで美しい